

日本中世の貨幣をめぐる諸問題

函館大学 教授 田中 浩司
函館工業高等専門学校 教授 中村 和之

会期：2018年12月1日（土）13:30～15:00

会場：函館大学 161教室

全体の構成

- 前半 40～50分程度

田中

日本中世の貨幣をめぐる諸問題 について、
ここ20～30年ほどでわかってきたことを紹介します

- 後半 30～40分程度

中村先生

北海道の中世の貨幣、出土銭貨について、個別事例に
基づいた最新の研究を紹介します

全体で80～90分



キャンパス・コンソーシアム函館主催
合同公開講座「函館学」 2018



日本中世の貨幣をめぐる諸問題

～ここ20～30年間でわかってきたこと～

函館大学

田中 浩 司

自己紹介

- 名前：田中浩司（たなか・ひろし）
- 職名：函館大学（商学部）教授
- 生年：1963年
- 出身地：東京都
- 最終学歴：中央大学大学院文学研究科
国史学専攻博士後期課程満期退学
- 専門分野：日本中世経済史
文献史学の立場から
日本中世とは、鎌倉時代～(南北朝、室町)～戦国時代、
+ 織豊時代（16世紀末）の、経済史。
とくに、貨幣（おカネ）、金融（おカネの貸し借り）、
財政（幕府、寺社などの収入と支出）の研究が専門

日本の中世と貨幣について おさらい1

1. 日本中世とは

□ **古代：** 古代： ～平安時代中期

□ **中世：**

中世成立期：平安時代後期 10世紀～or 12世紀初頭～

中世前期：鎌倉時代：12世紀末～1333年

中世後期：

南北朝時代：1333年～1392年

室町時代の目安：始期1392年～終期の諸説 1466年 応仁の乱開始 等

戦国時代の目安：15世紀後半・末期～

□ **近世**

織豊時代の目安：1568年（信長、足利義昭を奉じて上洛）～1599年

江戸時代 = 1600年（家康、関ヶ原合戦で勝利）～

→今回の田中の報告では、鎌倉時代から織豊時代までを視野に入れる

* 本講座で、「以前の講座・講演」とあれば、函館学2012での「函館志海苔出土銭と中世貨幣史研究」の講演のことを示す（その内容は〔田中浩司 2014〕所収）

日本の中世と貨幣について おさらい2

2. 貨幣とは、おカネとは

➤ 貨幣を機能・役割という観点からみると？

- ①交換の媒体
- ②支払いの手段
- ③価値尺度の役割（価値の大小がわかる単位、ものさし）
- ④価値蓄蔵の手段（価値を蓄え、保存しておく）

・・・経済学では、①～④の4つの機能を果たしている「モノ」を「貨幣」とよぶ

・ これ以外の貨幣の機能としては・・・贈答品（お祝い金、香典、お賽銭など）

⇒以上の点から、現代のおカネ = 貨幣

➤ 信用と価値からみた貨幣

名目貨幣：政府などが信用と価値を付与（現代の日本銀行券など）

商品貨幣（現物貨幣）：貨幣として以外に用途のある貨幣

秤量貨幣：貴金属の価値で、その重さを量って通用（金地金など）

➤ 貨幣の素材は？・・・モノは何でもよいが、変化しにくいモノがよい

現代：金属（銅・錫、銅・ニッケル、金、銀）、紙、プラスチック、その他

歴史的には：貝貨（バイカ。貝殻）、石、絹（絹布）、布（麻布）、紙、米、大豆、麦、タバコ、金属（金、銀、銅、鉄など）

日本の中世と貨幣について おさらい3

➤ 銭（貨）とは？ 数え方と単位

金、銀、銅などの金属でつくられた貨幣。多く、円形で中央に穴があるもの。

江戸時代、銅・鉄でつくられた貨幣のこと（小学館『精選版日本国語大辞典』2006年）

● 中世の文献史料上の表記・異称

鳥目（ちょうもく）、青銅（せいどう）、要脚・用脚、料足（りょうそく）、用途（ようと・ようとう）など

● 単位・・・基本的には「文」とその1000倍の「貫文」

文は、重さの文目 = 匁に由来。1枚 = 約3.75 g（～4 g）

1枚 = 1文 1疋（ひき） = 10文、

1緡（さし・こん） = 100文 1貫文・1結 = 1000文

□ おカネではない銭（おもに江戸時代）・・・絵銭（えせん・えぜに）、

玩具の銭、神仏への奉納用の模型の銭・・・念仏銭、題目銭など

➤ おカネといっても銭でないダメな場面：

お賽銭、六道銭、など

● 銭図版

富本銭 レプリカ
日本。683年初鑄



貨泉「泉・貨」
中国・新。14年初鑄



宣和通宝
北宋。
1119年初鑄



聖宋元宝
(右回りに読む)
北宋。
1101年初鑄。
大型銭



嘉定通宝
南宋。
1208年初鑄



洪武通宝
明。1368年初鑄



弘治通宝
明。
1503年初鑄



永樂通宝 明。1408年初鑄



問1. 渡来銭はなぜ輸入されたのか？

● 通説：

- 12世紀後期、平清盛が日宋貿易を強力に推進。大輪田泊（おおわだのとまり。現在の神戸港）を拡張整備。中国宋（北宋：960～1126年、南宋：1127～1279年）と貿易を行い、宋銭を貨幣として輸入。
- 治承3年(1179) 朝廷では、宋銭による沽価法（こかほう。公定価格表示法）を公認するか、宋銭使用の可否を論議。
- 『百鍊抄』治承3年6月条で、「銭の病」の流行の記述
・・・この記事は、宋銭の大量流入という「病」とされる。
- 以降、鎌倉時代を通じて、日本国内に急速に普及。
暦仁2年(1239) の鎌倉幕府法99条によれば
（典拠：佐藤進一ほか編『中世法制史料集 1』岩波書店）
本来、絹布で納入すべき陸奥国の年貢を、銭で納入する例が横行したため、白河関以東での銭の使用・流通を禁止。
・・・東北地方も含めて、全国に急速に銭が貨幣として普及した。

問1. 渡来銭はなぜ輸入されたのか？

- 前提：日宋貿易の理解をめぐって

宋との貿易は、平安後期にはかなり盛んであった

〔森克己 2008ほか〕

輸入品：香料・薬種、唐織物、文物、のちに銭、その他

輸出品：金（対価の支払手段）、その他

参考：1006年、宋の商人、蘇木ほかを藤原道長に献上

・・・この日宋貿易を一段と推進したのが、平清盛ら

問1. 渡来銭はなぜ輸入されたのか？

● 近年の成果

〔飯沼賢司 2014〕などによれば

1150年代を境に、銅製の経筒において、日本産材料のものが消滅して、中国産のものになる。

その後、宋銭は、日本国内の梵鐘などにも使用されていく。

〔平尾良光 2000〕などによれば

鎌倉大仏（1252年造立）の金属組成は、宋銭に近いという指摘。材料としての宋銭。

・・・平氏政権が、宋に求めた宋銭は、実は貨幣としてではなく、銅材料としてではないか。

・参考：銅銭の金属組成は、銅15：錫4：鉛1 程度

〔嶋谷和彦2001〕

問2. 鎌倉時代に使われていた貨幣とは？

- 鎌倉時代とは：

12世紀末、鎌倉幕府成立～1333年滅亡。

源頼朝が、鎌倉幕府を開いた。

幕府(東国)と朝廷(西国)という2つの「政府」。

荘園・公領制を基盤とした社会

(人、土地、税や経済・流通のしくみ)

- 前提の12世紀中後期：平氏政権が、宋銭を輸入

- 鎌倉時代に使われていた貨幣を

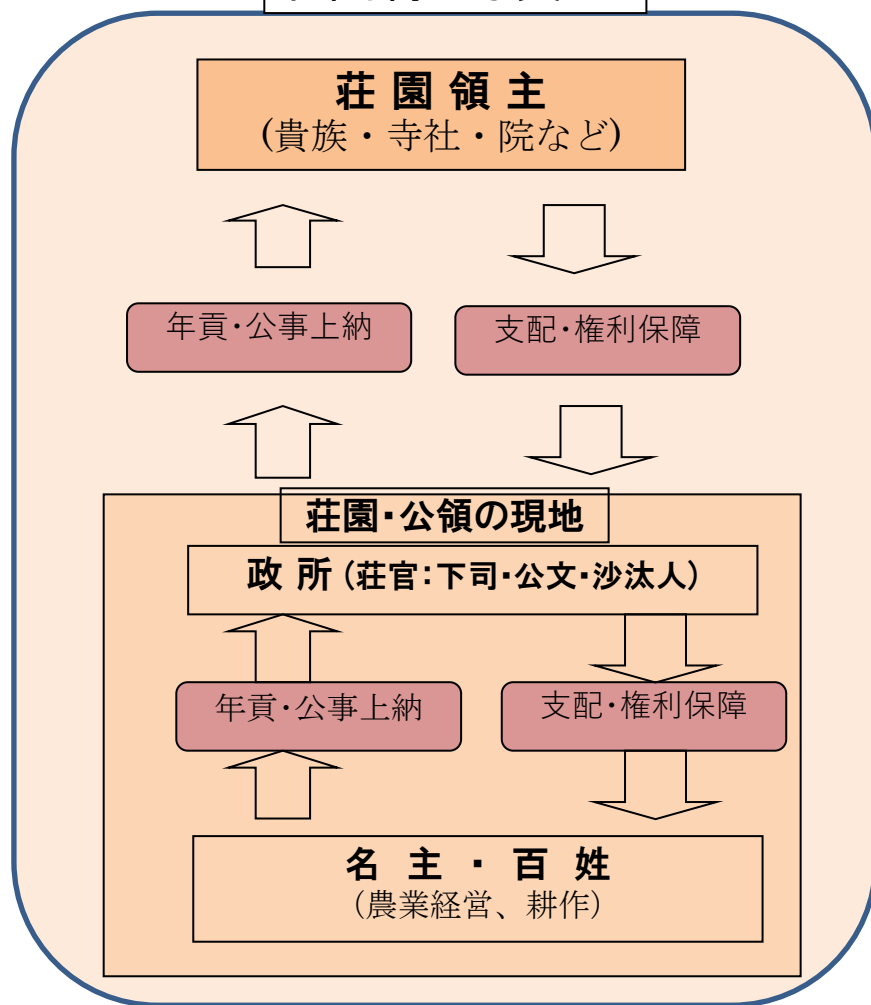
(1)租税データ

(2)土地売買契約書データ

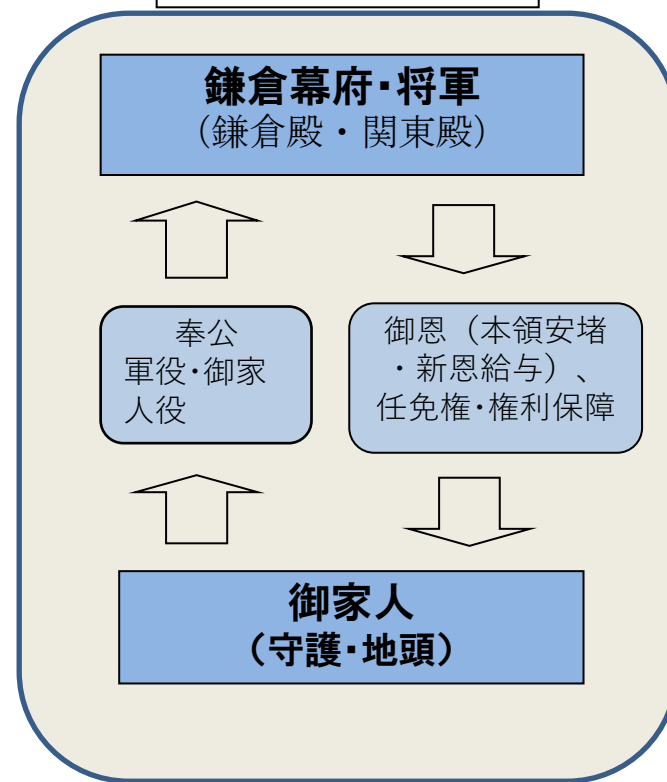
からよみとく

荘園公領制的支配と主従制的支配の関係図

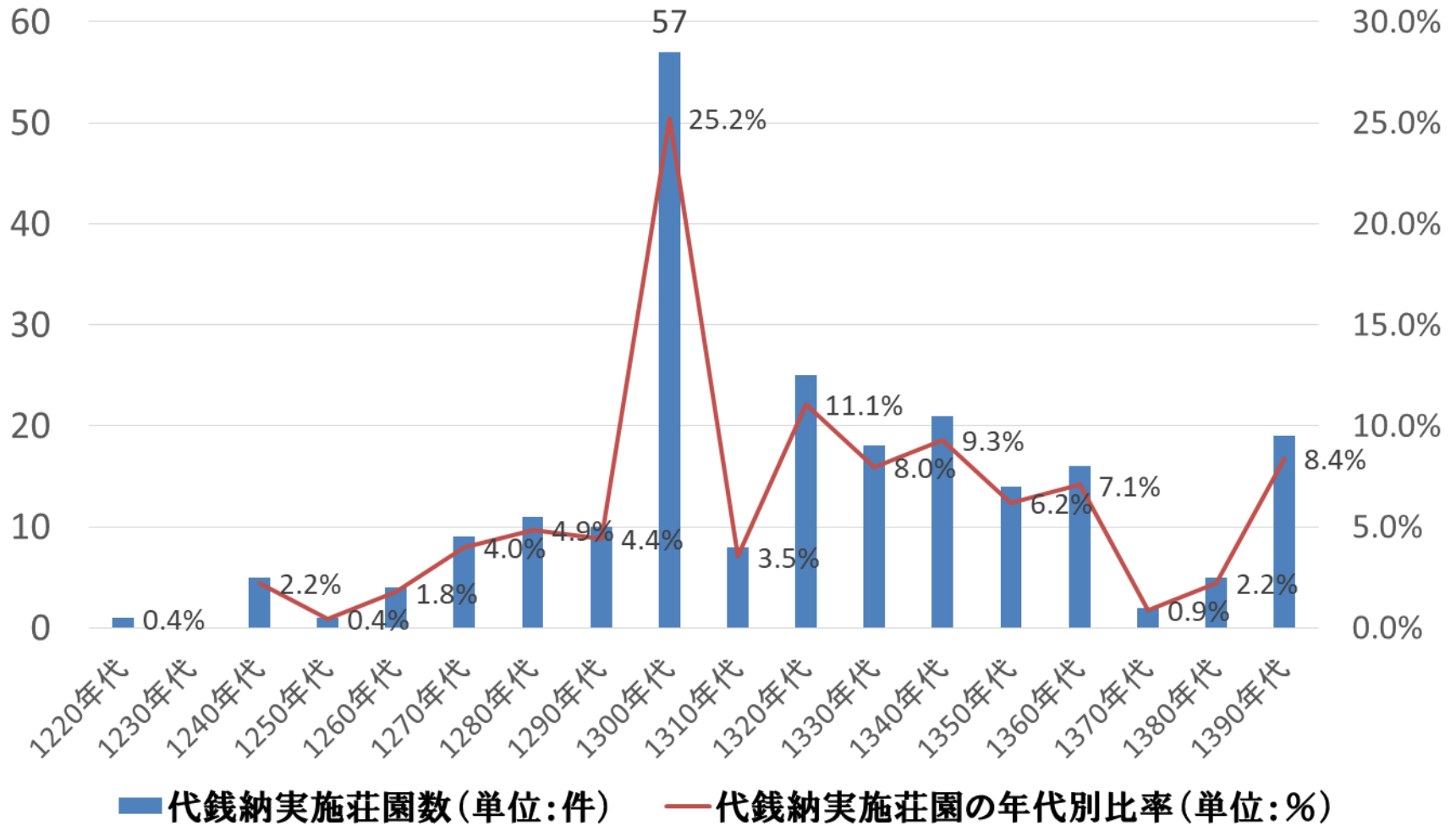
荘園制的な支配



主従制的な支配



(1) 代銭納(税を銭で納めること)を検出した 荘園数の推移 (総件数:226件)



出典：〔佐々木銀弥 1972〕より作成

問2. 鎌倉時代に使われていた貨幣とは？

➤〔佐々木銀弥 1972〕によると

荘園年貢の代銭納化は

1300年代、1320年代に代銭納の検出件数が多い。

1320年代、検出件数全体の57%で、半数を超える。

・・・13世紀末～14世紀前半期に銭が普及した

➤〔松延康隆 1989〕によると

土地売券（土地等の売買契約書）の支払取引からみると

鎌倉時代の貨幣・おカネとは、米と銭と絹布。

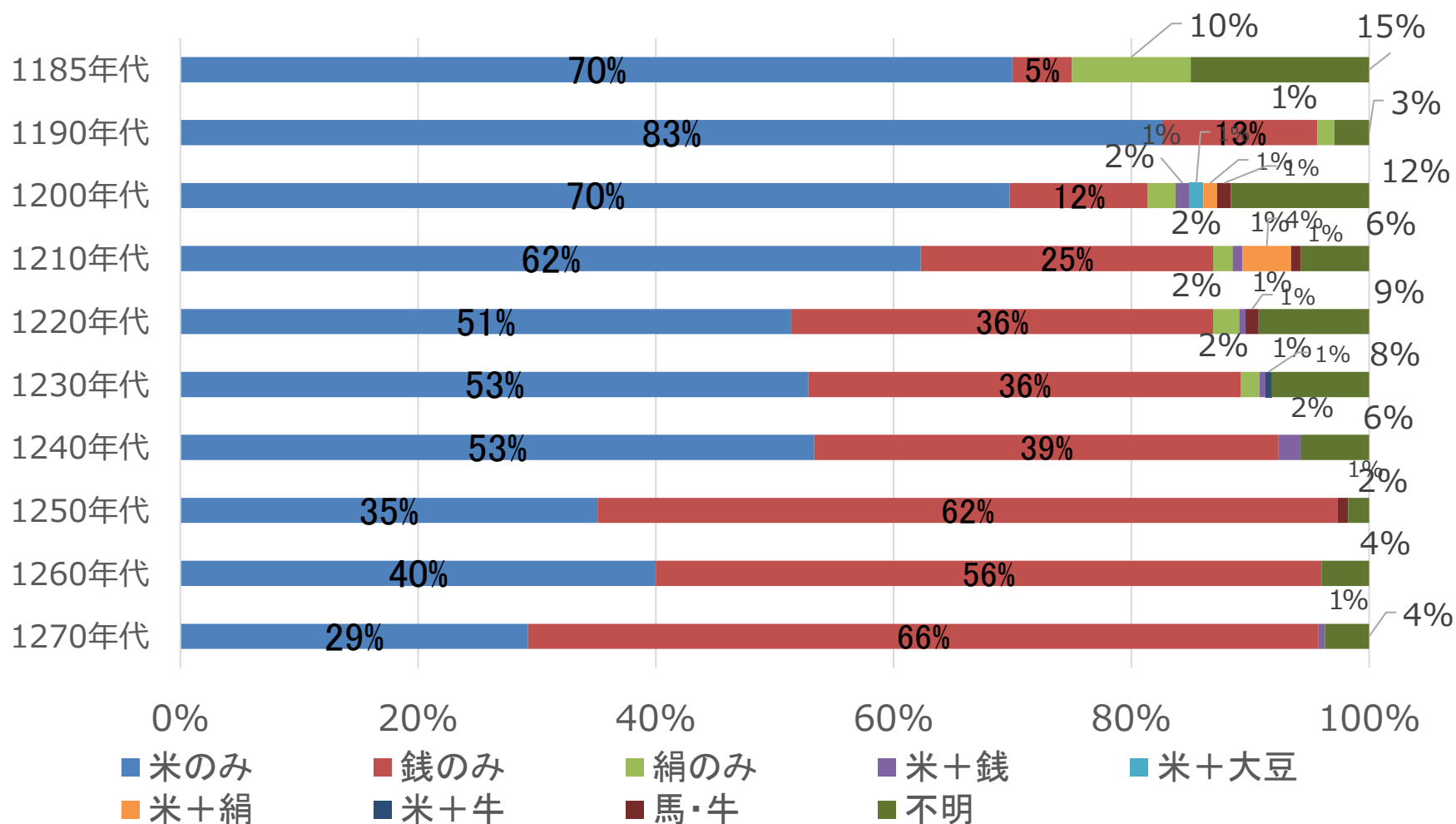
1240年代までに、絹布はほぼ消滅。

1250年代あたりから銭が普及し、米にとってかわる。

1320年代には8割が銭での取引に

・・・銭が主要な貨幣に。一程度、米がずっと残るが

(2) 土地売券における支払手段の変化



出典：相澤理樹人・青木優（田中監修）「データから鎌倉時代をよみとく試み」〈キャンパス・コンソーシアム函館 合同研究発表会はこだてアカデミックリンク2016〉2016年）発表データ。

問2. 鎌倉時代に使われていた貨幣とは？

- [相澤・青木、田中 2016]によると
たしかに、米、絹、銭が主流であり、
絹の消滅、米から銭への転換という趨勢 ではあるが・・・
あらためて細かくみてゆくと
1180年代～1250年代、米・銭・絹以外に、
牛・馬、大豆などの多様な支払手段の存在。
また、米、銭などの単独ではなく、組み合わせもある。
このことは、鎌倉時代、とくに1250年代までは、
米、銭、絹だけでなく大豆、牛・馬など、
多様な支払手段が試行された（試しに使われた）時期。
・・・だから併存していたのではないか。
やがて、米は一定の地位を占めるが、銭中心へと展開。

問3. 日本中世に流通していた銭とは？

●前提

- 15世紀後半期以降に、守護大名大内氏や室町幕府などによって発令された撰銭令にみえる銭種（・・・日常的な通用に支障が出ていた銭）は、永楽通宝（永楽銭）、宣徳通宝、洪武通宝など、すべて中国明（みん）の明銭。

→では、日常的に支障なく通用していた銭とは？
銭種が確認できないという苛立ち

問3. 日本中世に流通していた銭とは？

● ここ30年間くらいの出土銭の発掘成果

〔鈴木公雄 1999〕〔永井久美男1994・1996〕などによると

- 全国的な出土銭の発掘成果によると、日本中世に埋められたとみられる銭は、その大部分が宋銭。とくに北宋銭が多いことが判明。
 - 埋められた銭とは、財産として蓄えていた銭。将来的にも通用する銭という認識。
 - 北宋銭の銭種は多様だが、ついで、唐の開元通宝、南宋銭なども多く、明銭登場以降は、明銭も多く含む。日本の皇朝十二銭、その他のアジアの銭も。これらが混在して流通。
 - 中国の大型銭は、周圀を削って、小型化して使用
(例えば〔田中浩司 2014〕参照)
- ・・・その後、列島各地で、ある程度の「個性」があることも判明

志海苔出土銭の銭種・枚数

(出土枚数上位10種)

順位	銭貨名	発行国	初鑄年	出土枚数	備考
1	皇宋通寶	北宋	1038	48,679	
2	元豊通寶	北宋	1078	45,173	
3	熙寧元寶	北宋	1068	36,447	
4	元祐通寶	北宋	1086	35,242	
5	開元通寶	唐	621	31,920	
6	天聖元寶	北宋	1023	18,528	
7	紹聖元寶	北宋	1094	15,937	
8	政和通寶	北宋	1111	15,823	
9	聖宋元寶	北宋	1101	15,396	
10	祥符元寶	北宋	1008	9,772	
				272,917	小計
	洪武通寶	明	1368	13	最新銭
	四銖半兩	前漢	BC175	8	最古銭
	和同開珎～延喜通寶	日本	708～907	15	皇朝十二銭

〔中村和之・野村祐一 2012〕より田中が作成

問4. 日本中世に銭の生産はあったか？

● 通説

律令国家が発行した皇朝十二銭以降、日本国内で本格的な
鑄銭が行われたのは、江戸時代の寛永通宝など。

建武元年(1334) 乾坤通宝という銭と紙幣発行計画あり。

● 8世紀の私鑄銭問題

➤ 『続日本紀』和銅2年(709)正月25日条

和同開珎銀銭の私鑄に対する罰則規定の記事。

→私鑄銭の初見記事とされる。以降、私鑄の記事は頻出。

銭の私鑄が国家的な問題事

・・・銭の私鑄は、当時としては容易で、政府の工房以外でも

よく行われていた可能性を示唆。

11世紀、銭の流通が相当に衰退。

皇朝十二銭(本朝十二銭)

➤ 皇朝十二銭 = 律令国家が発行した和同開珎から乾元大宝までの12種類の銅銭 (+ 銀銭・金銭を含める考えもある)

①708年 和同開珎 (銀銭・銅銭) 発行—皇朝十二銭の最初

②760年 万年通宝(銅銭)、太平元宝(銀銭)、
開基勝宝(金銭)発行

③765年 神功開宝 ④796年 隆平永宝、

⑤818年 富寿神宝 ⑥835年 承和昌宝

⑦848年 長年大宝 ⑧859年 饒益神宝 (にょうえきしんぽう)

⑨870年 貞観永宝 ⑩890年 寛平大宝

⑪907年 延喜通宝

⑫958年 乾元大宝 (けんげんたいほう) —皇朝十二銭の最後

→銭は徐々に小型化、粗悪化 (鉛の比率が増加) で信用を失う。

11世紀、銭の流通は大きく衰退 (〔瀧澤武雄 1996〕などによる)

問4. 日本中世に銭の生産はあったか？

- 12世紀の渡来銭の大量流入以降

- 全国各地での銭鑄型の発見

(1) 堺(和泉国。大阪府堺市)での事例〔嶋谷和彦1998,2001など〕
堺環濠都市遺跡で、16C半ば～後半の多数の銭鑄型の発見
鑄型は、無文のものと渡来銭の銭文を2通り。

渡来銭の銭種は、開元通宝（唐）以外では、

皇宋元宝、元祐通宝、政和通宝などの北宋銭が多数。

永楽通宝（明）はない。

→堺での銭生産の可能性、実態。

大内氏の撰銭令(後述)の「さかひ銭」とは堺で生産された銭では？

堺の模鑄銭は金属組成をみると、銅の比率が高い〔嶋谷2001〕

問4. 日本中世に銭の生産はあったか？

➤ 全国各地での銭鑄型の発見

(2) 平安京八条院町（京都）などでの事例〔山本雅和 2001〕

13C後半～14Cの多数の銭鑄型の発見。

政和通宝、元豊通宝、紹(聖)元宝などの北宋銭が多数。

(3) 鎌倉（神奈川県鎌倉市）での事例〔宗臺秀明 1997〕

13C末～15C初頭の多数の銭鑄型の発見。

開元通宝（唐）、政和通宝などの北宋銭が多い。

(4) 博多（福岡市）での事例

➤ 永楽通宝の枝銭の発見

製塩遺跡「村松白根遺跡」(茨城県)から

永楽通宝の枝銭（えだぜに。製造途中のもの）が出土

→ 日本中世において、渡来銭の模鑄銭の生産が行われていた



問4. 日本中世に銭の生産はあったか？

➤ 永楽通宝の国内生産を示す文献史料

「鳴海平蔵由緒書」覚（『古事類苑 泉貨部・称量部』所収）

応永年中(1394～1428)、足利公方勝定院義持公の御代、朝鮮国より永楽銭三千貫文（300万枚）を貢ぎ奉り、是れ珍宝なりとて、日本にて賞玩す。金銀との取替も高値にて、壹貫文は〈金壹両四分八分(ママ)〉と定むる。然れども、員数わずか三千貫文にて通用に足らざる故、我が朝（日本）にて、その後、永楽銭の鑄たし（鑄造）を仰せ付けられ候（命じられた）、此の節、京都に於いて、銭奉行職を仕り候、

→鳴海氏（江戸幕府で寛永通宝の鑄造に携わった家）〔高木久史2018〕

が、応永年間以降に、国内で永楽通宝の鑄造を命じられ、京都で銭奉行職となっていた！という記事。

問4. 日本中世に銭の生産はあったか？

- 永楽通宝の枝銭と「鳴海平蔵由緒書」の記述から
永楽通宝が、日本国内で組織的に製造されていた可能性。
 - 撰銭令にみえる永楽通宝 出典：佐藤進一ほか編『中世法制史料集第3巻』(岩波書店)
 - 文明17年(1485) 大内氏の撰銭令
第2条：利銭(利子付きの貸借)や売買の取引の銭では、
誰であっても、永楽・宣徳は選んで(排除して)はいけない。
 - ①さかひ銭(堺銭?)、洪武銭、打平(うちひらめ)は排除せよ
…粗悪だから市中でも排除せよ
 - ②永楽銭・宣徳銭は、100文に30文を混ぜて使用せよ
…市中では人気がないが、大内氏は通用させたいから
- 永楽通宝は、市中の取引で忌避されており、
精銭(1枚=1文以上の銭)より低めの価値で通用。

問4. 日本中世に銭の生産はあったか？

- なぜ永楽通宝などが嫌われたのか
 - 国内製造の模鑄銭（永楽銭を含む）の特徴
金属組成として、銅が多い。錫、鉛が少ない。
…文字が不鮮明。鮮明な赤銅色（カッパー色）。
 - 近年の問題提起〔三宅俊彦2001〕
永楽通宝（1408年初鑄）は、明国内ではほとんど流通していない。一種の輸出用の銭といえる。
- 日本国内で、北宋銭や永楽通宝が模鑄(生産)されていたことは確実。
- 西国で永楽通宝が嫌われたのは、明では流通していなかったためか？ 国内模鑄銭の特徴を持っていたためか？

問5. 16世紀の貨幣流通の地域性と多様性

● 撰銭令からみえる16世紀の銭の多様性

➤ 永正6年（1509）室町幕府撰銭令

京銭(きょうせん、きんせん)、打平（うちひらめ）は選ぶ（排除する）こと
渡唐銭（明銭の永楽銭、洪武銭、宣徳銭と、われ銭）以下をとりあわせて、
100文に32文を混ぜて使え。

出典：佐藤進一ほか編『中世法制史料集第2巻』（岩波書店）

➤ 永禄12年(1569) 織田信長撰銭令

「ころ」「やけ銭」「ゑみやう（恵明）」「大かけ」「われ」「すり」
「うちひらめ（打平）」「なんきん（南京）」

出典：佐藤進一ほか編『中世法制史料集 第5巻』（同上）

➤ 一定の価値をもつ特定の銭の登場〔本多博之 2006〕

戦国期の石見国では、「鍛(ちゃん)」「南京」という銭の存在
・・・銭○○文ではなく、鍛△△文 といった表記

問5. 16世紀の貨幣流通の地域性と多様性

➤ 京都と地方

- ① 16世紀、甲斐国（山梨県）で「南京」（なんきん）という低位銭の流通の事実（「妙法寺記」）
- ② 16世紀、能登で年貢として納入された銭が、京都では悪銭とされ、受け取ってもらえない事例〔川戸貴史2008, 田中浩司2007〕
- ③ 青森県内での出土銭が、粗製の銭の含有率が高いという事実〔工藤清泰 2001〕

→ 京都から離れた地域では、京都では通用しないような低品位の銭が、通用銭として流通していた可能性。

まとめと課題

- まとめ
 - 問 1. 渡来銭はなぜ輸入されたのか？
 - 問 2. 鎌倉時代に使われていた貨幣とは？
 - 問 3. 日本中世に流通していた銭とは？
 - 問 4. 日本中世に銭の生産はあったか？
 - 問 5. 16世紀の貨幣流通の地域性と多様性
- 上記以外にも多くの事実発掘
 - 16世紀の悪銭の増加、物価との関係
 - 1570年代の銭流通の衰退と米の復権
 - 16世紀の金銀の普及時期と用途
 - 織田信長の撰銭令の位置付け などなど

まとめと課題

- 全般に関する課題

- 金属組成などの自然科学的なデータ、考古学的なデータの蓄積は進んだが、文献史料による物価、金融などの経済データの不足。

→経済史的な裏付けの弱さ

- 中村先生の講演に接続する課題

- 渡来銭はどこから来たのか？

日本中世、海外との窓口は複数

南から？日本海側から？北から？

参考文献

- 飯沼賢司 2014 「日本中世に使用された中国銭の謎に挑む」〔平尾良光ほか編 2014〕所収
- 池 享編 2001 『貨幣—前近代日本の貨幣と国家—』 青木書店
- 浦長瀬隆 2001 『中近世日本貨幣流通史』 勁草書房
- 川戸貴史 2008 『戦国期の貨幣と経済』吉川弘文館
- 工藤清泰 2001 「青森県浪岡城跡の模鑄銭」〔東北中世考古学会編 2001〕所収
- 黒田明伸 2003 『貨幣システムの世界史』 岩波書店
- 小葉田淳 1958 『日本の貨幣』 至文堂
- 小葉田淳 1968 『日本貨幣流通史』 刀江書院
- 桜井英治・中西聡編著 2002 『新日本史体系12 流通経済史』 山川出版社
- 櫻木晋一 2009 『貨幣考古学序説』 慶應義塾大学出版会
- 櫻木晋一 2016 『考古調査ハンドブック15 貨幣考古学の世界』 ニューサイエンス社
- 佐々木銀弥 1972 『中世商品流通史の研究』 法政大学出版局
- 嶋谷和彦 1998 「中世・堺で生産された銭」 田中琢ほか編 『古代史の論点3 都市と工業と流通』所収、小学館
- 嶋谷和彦 2001 「堺の模鑄銭と成分分析」〔出土銭貨研究会 1997〕所収

参考文献

- 宗臺秀明 1997 「鎌倉出土の錢貨鑄型について」〔出土錢貨研究会 1997〕所収
- 出土錢貨研究会編 1997 『わが国における錢貨生産—出土錢貨研究会 第4回大会報告要旨—』
- 市立函館博物館 1973 『函館志海苔古錢』 市立函館博物館友の会
- 鈴木公雄 1999 『出土錢貨の研究』 東京大学出版会
- 鈴木公雄 2002 『錢の考古学』 吉川弘文館
- 鈴木公雄編 2007 『貨幣の地域史』 岩波書店
- 高木久史 2010 『日本中世貨幣史論』 校倉書房
- 高木久史 2018 『撰錢とビター文の戦国史』 平凡社
- 瀧澤武雄 1996 『日本の貨幣の歴史』 吉川弘文館
- 瀧澤武雄・西脇 康編 1999 『〈日本史小百科〉貨幣』 東京堂出版
- 田中浩司 2003 「十六世紀前期の京都真珠庵の帳簿史料からみた金の流通と機能」 峰岸純夫編『日本中世史の再発見』所収、吉川弘文館
- 田中浩司 2007 「貨幣流通からみた十六世紀の京都」〔鈴木公雄編 2007〕所収
- 田中浩司 2014 『(合同公開講座 函館学2012)函館志海苔出土錢と中世貨幣史研究』 キャンパス・コンソーシアム函館 函館学ブックレットNo.24

参考文献

- 田原良信 2003 「志海苔中世遺構出土銭の再検討」『出土銭貨』19号
- 田原良信 2004 「再考 志海苔古銭と志苔館」『(市立函館博物館)研究紀要』14号
- 東野治之 1997 『貨幣の日本史』 朝日新聞社
- 東北中世考古学会 2001 『中世の出土模鑄銭』 高志書院
- 中島圭一 1992 「西と東の永楽銭」 石井進編『中世の村と流通』所収、吉川弘文館
- 中島圭一 1999 「日本の中世貨幣と国家」〔歴史学研究会編 1999〕所収
- 中村和之・野村祐一 2012 「南北海道の高銭とベトナム銭「開泰元寶」の発見」『月刊 考古学ジャーナル』626
- 永井久美男編著 1994 『中世の出土銭』 兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男編著 1996 『中世の出土銭 補遺 I』 (同上)
- 平尾良光 2000 「大仏の材料の産地はどこか」 朝日百科日本の国宝別冊『国宝と歴史の旅7』 朝日新聞社
- 平尾良光・飯沼賢司・村井章介編 2014 『大航海時代の日本と金属交易』 思文閣出版

参考文献

- 本多博之 2006 『戦国織豊期の貨幣と石高制』 吉川弘文館
- 松延康隆 1989 「錢と貨幣の觀念」『列島の文化史』6号 日本エディタースクール出版部
- 三宅俊彦 2005 『世界の考古学12 中国の埋められた錢貨』 同成社
- 森 克己 2008 『新訂 日宋貿易の研究』 勉誠出版
- 山本雅和 2001 「平安京八条院町と錢貨鑄型」〔東北中世考古学会編 2001〕所収
- 歴史学研究会編 1999 『シリーズ歴史学の現在 1 越境する貨幣』 青木書店

御清聴
ありがとうございました